

アンドレ・シュヴァルツ＝バルトの小説における墓

中 里 まき子

序

オイディプスの4人子どもたちが登場するソフォクレス『アンティゴネ』は、墓の有無をめぐる展開するギリシア悲劇である。オイディプス亡き後、2人の息子エテオクレスとポリュネイケスは1年交替でテーバイの王となる取り決めであったが、エテオクレスが王位に留まろうとした。そのためポリュネイケスは隣国アルゴスの助けを借りてテーバイを攻め、兄弟は刺し違える形で戦死する。その後、新王に即位した2人の叔父クレオンは、エテオクレスを英雄として手厚く葬る一方、ポリュネイケスを反逆者とみなし、その遺体を埋葬することを禁じて野ざらしとした。するとオイディプスの2人の娘イスメネとアンティゴネは、この状況に対して異なる立場をとる。イスメネはクレオン王に従うことを選ぶが、アンティゴネは王命よりも自然の掟を尊重し、兄エテオクレスの遺体に砂をかける。王に刃向かう彼女は捕らえられ、最終的に命を落とす。

この物語は2000年以上にわたって継承され、ソフォクレス版が繰り返し上演された以外にも、さまざまに変奏されてきた。例えばアンジェイ・ワイダ監督映画『カティンの森¹⁾』(2007年)において、ある姉妹——姉イレナと妹アグニェシュカ——の対立を彩るモチーフとして使われた。アグニェシュカは、第2次世界大戦期のカティンの森事件で殺された兄について、ポーランド政府の意向に反して死の真相究明を試み、兄の墓碑の費用を捻出するために長い金髪を鬻職人に売る。彼女がアンティゴネ的人物であることは、売った髪で作られる鬻を被るのが女優であり、その女優が悲劇『アンティゴネ』で主役を演じるという設定によって暗示される。アグニェシュカの姉イレナは過去に拘泥せず、新しい時代に適合して生きるのに対し、政権に従わないアグニェシュカは処刑されてしまう。この例以外にも、フランソワ・オストの戯曲『ヴェールを被ったアンティゴネ²⁾』のようなソフォクレス版の翻案もなされていることから、兄の遺体の埋葬を望み、そのために命を投げ出す妹の姿は、現代人の心にも訴えかけるものであることがわかる。

本稿では、墓のない死者たちに心を寄せ続けた作家として、アンドレ・シュヴァルツ＝バルト (André Schwarz-Bart, 1928-2006) を取り上げる。同作家のエクリチュールには2つの側面——ショアー文学とカリブ海文学——があるが、現在までの研究において両者は有機的に連結されてこなかった³⁾。以下では、墓に着目した読解によって、2つの領域がいかに照応する

1) Andrzej Wajda, *Katyn*, 2007.

2) François Ost, *Antigone voilée*, Larcier, « Petites fugues », 2004.

3) シュヴァルツ＝バルト研究の第一人者は、生前の作家とも親交のあったバル＝イラン大学 (イスラエル) 名

のか、その一端を見ることになるだろう。

墓のないユダヤ人たち

シュヴァルツ=バルトの小説『最後の義人』(*Le Dernier des Justes*)は、1959年にスイユ社から出版され、同年、ゴンクール賞を受賞した。翌年までに50万部以上を売り上げ、ショアー文学としてはフランス初のベストセラーとなった。

本小説は、神の慈悲により、各世代ひとりの「義人」を授かることになったユダヤ人の家系、レヴィ家の中世から20世紀に至る系譜物語である。物語の鍵となる「義人」(イディッシュ語でラメド・ヴァフ)とは、ユダヤの伝承——各世代には36人の義人がいて、この世の苦しみはその人々に流れ込み、彼らが世界の存続を可能にする——から着想されたものである。代々のレヴィ家の人々が直面した受難の経験として、ヨーロッパ各地におけるユダヤ人迫害の多様な形態が描き出された後、最後の義人エルニ・レヴィがアウシュヴィッツのガス室で息絶え、小説は幕を閉じる。この壮大な物語を語り終えた語り手は、読者にこう呼びかける。

そういうわけでこの物語は、思い出にどこかの墓を訪ねる場面で終わりはしない。死体焼却炉から出てくる煙は、他の煙と同様、物理学の法則に従うのだから。微粒子は、それを運ぶ風の中で寄り集まっては四散してしまう。賢明な読者よ、唯一の巡礼は、時々、憂鬱な気分で見上げる空のことだろう⁴⁾。

小説『最後の義人』は、作者自身の喪失体験を契機として書かれた。彼は1928年にメッスのユダヤ人地区に生まれた⁵⁾。母語はイディッシュ語であり、戦況の悪化のせいで学校へ通うことができず、苦労してフランス語を身につけた⁶⁾。第2次世界大戦開戦後、シュヴァルツ=バルト一家はまず1940年にオレロン島へ、続いて1941年にアングレーム近郊への移住を余儀なくされた⁷⁾。1942年から翌年にかけて両親と兄弟2人が相次いでアウシュヴィッツに移送され、妹も逮捕されると、14歳のアンドレは3人の弟の保護者となった⁸⁾。

誉教授フランシヌ・コフマンである。『最後の義人』に関する博士論文をもとに次の書籍を刊行した。Francine Kaufmann, *Pour relire le Dernier des Justes : Réflexions sur la Shoah*, Méridiens-Klincksieck, 1987. コフマンは後述のカリブ海連作の出版に携わったが、近年の研究においても『最後の義人』の生成を主たる対象としている。他の研究者も、同作家の2つの側面のうち一方のみに着目する傾向がある。ショアー文学としての研究にJoë Friedemann, *Langages du désastre : Robert Antelme, Anna Langfus, André Schwarz-Bart, Jorge Semprun, Elie Wiesel*, Librairie Nizet, 2007 ; Fransiska Louwagie, *Témoignage et littérature d'après Auschwitz*, Brill/Rodopi, 2020等がある。カリブ海文学としての研究にKathleen Gyssels, *Filles de Solitude : Essai sur l'identité antillaise dans les (auto)-biographies fictives de Simone et André Schwarz-Bart*, L'Harmattan, 1996 ; Anais Stampfli, *La Coprésence de langues dans le roman antillais contemporain*, Peter Lang, 2020等がある。

4) André Schwarz-Bart, *Le Dernier des Justes* [1959], Seuil, « Points », 1996, pp. 424-425.

5) 本名はAbraham Szwarcbartであるが、レジスタンスに参加した際にAndré Chabardと名乗った。『最後の義人』出版前にスイユ社の勧めでAndré Schwarz-Bartとした。Simone Schwarz-Bart et Yann Plougastel, *Nous n'avons pas vu passer les jours*, Grasset, 2019, p. 51.

6) *Ibid.*, p. 53, p. 79.

7) *Ibid.*, p. 55.

8) *Ibid.*, pp. 56-57.

小説の主人公エルニ・レヴィがガス室で落命したのに対し、作者シュヴァルツ=バルトは収容所を知らないため、2人の人生には決定的な相違があるが、重なる部分もある。小説において、家族が皆、絶滅収容所へ送られたことを知ったエルニが絶望し、別人として生き始めるように、アンドレ・シュヴァルツ=バルトも両親と2人の兄弟を収容所で失い、この経験ゆえに小説を手がけることとなった⁹⁾。

1959年5月、『最後の義人』の原稿をスイユ社に提出したばかりのアンドレは、グアドループ出身の両親を持つシモーヌと、パリのメトロの駅前で偶然に出会った。その時から彼は、本小説の執筆意図について彼女に語ってきた。アンドレは2006年に没したが、シモーヌが夫婦の歩みを回顧し、2019年に刊行した『時が経つのも忘れて』(*Nous n'avons pas vu passer les jours*)において、彼女はアンドレの執筆意図を伝えている。

こうした混乱の時期に私たちが交わした手紙の中で彼は書いていた。この仕事によって彼は、自分の家族、つまり両親、2人の兄弟、大おばにオマージュを捧げただけであった。彼は消え去った文明の喪に服していた。その文明と共に失われたのは、その精神性、ツァディーク [ヘブライ語で義人のこと]、完全なる惨劇のただ中でもなされた人間性の必死の追求であった。彼はこの世界、この民族、子ども時代の神の喪に服していた。彼の仕事の意味はそれに尽きていた¹⁰⁾。

またシモーヌは次のように述べる。

アンドレは『最後の義人』を、雲でできた墓に捧げる弔辞として構想していた。ユダヤ人の生き残りであり、若い労働者である彼は、遺体焼却炉の煙突から煙として旅立った文明にオマージュを捧げたかった¹¹⁾。

このような動機から執筆に取り組んだアンドレは、収容所のガス室で死んでいくユダヤ人たちを描く際にも、彼らへの畏敬の念を書き込んでいる。

ガスの層がすべてを包み込んだとき、死の部屋の暗い空には1分間ほどの沈黙があった。それは、甲高い咳の発作と、苦悶にはまり込みすぎて献身どころではない者たちの喘ぎによってのみ遮られた。そしてユダヤ人が——2000年前から剣を使わず、使命を与えられた王国も、有色人種の奴隷も持たなかった彼らが——炎火の煙を越えて、歴史の随所にある火刑台を越えて、地上の固い樹皮に血の文字で認めてきた古い愛の詩が、まずは小川として、それから滝、そして抑えられない威厳ある奔流としてガス室に沸き起り、溢れ、底知れぬ陰鬱なせせら笑いを圧倒した。「CHEMA ISRAËL ADONAI ELOHENOU ADONAI EH'OTH …… お聞きください、イスラエルよ。永遠なるわれらの神よ。永遠なる唯一の者よ。おお、主よ。その恵みによってあなたは生者たちを養います。その偉大なる慈悲によってあなたは死者たちを甦らせます。あなたは弱き者を支え、病める者を治し、奴隷の鉄鎖を砕きます。そしてあなたは塵に塗れて眠る者たちとの約束を誠実に守ります。あなたのような方が

9) *Ibid.*, p. 77.

10) *Ibid.*, pp. 40-41.

11) *Ibid.*, p. 97.

他にいますか？ おお、慈悲深い父よ。いったい誰があなたに似ているというのでしょうか¹²⁾？……」

『最後の義人』は国内外で大成功を収めたが、一方で激しい批判も浴び、他の著作からの盗用や、歴史上の出来事に関する誤謬が指弾された。さらにユダヤ同胞からも攻撃されることとなった。その状況について、研究者フランシヌ・コフマンは述べる。

意に反して、シュヴァルツ=バルトはユダヤ民族と強制収容所世界の犠牲者たちの代弁者となったのだが、伝統の真の継承者や、真の「証人」を自認する一部のユダヤ人によって、その役割を否認された¹³⁾。

傷ついた作者は一旦国外に去り¹⁴⁾、フランス文壇からは距離を置いた。

墓のない黒人奴隷たち

しかしその後も彼は、妻シモーヌと二人三脚で文筆活動を続けた。夫妻の執筆の主題は、アフリカからカリブ海地域に奴隷として移送され、売買された黒人たちの境遇——ショアーのユダヤ人と重なる——であった。2人は、1967年に連名で発表した『青バナナ入り豚肉料理』(*Un plat de porc aux bananes vertes*)に始まる全7作のカリブ海連作(cycle antillais)によって、数世代にわたる黒人家系の物語を書き上げる構想をもっており、その2作目として1972年にアンドレ単独の『混血女性ソリチュード』(*La Mulâtresse Solitude*)が刊行された。

主人公ソリチュードは、西アフリカで捕縛されたバヤングマイが、奴隷船上で白人乗組員に強姦された末、グアドループの農園で生んだ混血児である。彼女は母に捨てられ、奴隷として何度も転売され、人間性を喪失するが、美しい歌声の若者に成長する。1795年、フランス革命がカリブ海の植民地に波及して奴隷制の廃止が宣言されるも、黒人たちに真の自由は訪れず、やがて彼女は白人の支配に抵抗する者たちの先頭に立って戦う。1802年5月にナポレオン軍が上陸した後、抵抗派の領袖デルグレスが引き起こした自爆テロで負傷したソリチュードは、身重の体で捕縛される。そして出産の翌日、11月29日に処刑される。

アンドレは、1959年にシモーヌと出会う前からクレオール語を学び、エドゥアール・グリッサンらカリブ海地域出身者たちと交流し、彼らが背負う奴隷制の歴史ゆえに特別な親近感を抱いていた¹⁵⁾。上記のカリブ海連作を彼が構想し始めたのも、『最後の義人』を執筆する前の1955年であった¹⁶⁾。そのため、『最後の義人』における強制収容所への移送列車の場面と、『混血女性ソリチュード』の奴隷船の場面との類似など、2作品の随所に呼応が見られるが、ここで指摘したいのは、アンドレが描く黒人奴隷たちもまた、ショアーのユダヤ人同様、死後に墓

12) André Schwarz-Bart, *op. cit.*, pp. 423-424.

13) Francine Kaufmann, « André Schwarz-Bart, le Juif de nulle part », *L'Arche*, n° 583, décembre 2006. 2022年3月9日にPDF版を参照した (<http://judaisme.sdv.fr/perso/schwbart/arche.pdf>).

14) アンドレは南米の仏領ギアナに向かった。その後、マルティニック、グアドループ、セネガル、ルクセンブルク、スイスなどに滞在した。

15) Simone Schwarz-Bart et Yann Plougastel, *op. cit.*, pp. 102-103.

16) *Ibid.*, p. 107.

で休らうことを許されなかった点である。

『混血女性ソリチュード』の第1部は西アフリカで展開する。ソリチュードの母バヤングマイの幼少期や結婚に続いて、彼女が黒人狩りに遭い、カリブ海へ向かう奴隷船に乗せられるまでが語られる。当時、西アフリカで捕縛された黒人たちは一旦、ダカール沖合いのゴレ島にある収容所に連行された。そこで収容者が死亡すると、遺体は海に投げ捨てられた。

毎朝、夜のうちに亡くなった者たちの遺体が引き出された。それは海に張り出した港から捨てられ、決まって別の言語を話す新参者たちにとって替わられた¹⁷⁾。

そして海に投げ入れられた遺体は、鯨の餌食となった。

鉤爪のように曲がった鯨の頭が、海岸から数メートルのところに突き出していた。夜の死者たちを投げ入れた地点から遠くはなかった¹⁸⁾。

また、グアドループの農場では、黒人奴隷の遺体は畑の肥料とされた。

亡くなったばかりのロザリーという老婆は、未開墾地になんとなしに埋葬された。この一時的な仮の墓地は、やがてサトウキビの茎を育むことだろう¹⁹⁾。

過酷な生に続き、死後も墓で休らうことを許されなかった黒人奴隷たちは、自分たちの境遇を正当化するかのように独自の死生観を持つこともあった。グアドループの農場でボベット母さんと呼ばれるようになったバヤングマイに対し、年老いた義足の男は言う。

もう何回も言ったね、おまえさん。俺たちは、牛として白人に仕えるためにここにいるわけじゃない。アフリカの神々が俺たちを送り込んだのは、この国を占領するためだ。神々の声に従う者は皆、帰りの船に乗るだろう²⁰⁾……。

するとボベットは「そもそも船とは何だい？」と尋ね、それに対し義足の男は「船とは死のことだ……」と答える²¹⁾。

この小説はまた、黒人奴隷たちが望んでいた埋葬の形をも伝えている。1795年に廃止された奴隷制は、1802年にナポレオンによって復活することになるが、その間、奴隷制復活を企図するフランス軍と、抵抗する元奴隷たちの攻防戦が続いていた。元奴隷たちにとって形勢は圧倒的に不利であり、多数の死者が出た。そうした死者たちの埋葬に彼らの願いが映し出されている。

まず、老人、老女たちが死亡し、それから、かつて主人たちが「つまらないもの」と呼んでいた、わずかな子どもたちが続いた。最後に太りぎみの女性たちが死んで、大木の湿り気の

17) André Schwarz-Bart, *La Mulâtresse Solitude* [1972], Seuil, « Points », 2013, p. 37.

18) *Ibid.*, p. 39.

19) *Ibid.*, p. 49.

20) *Ibid.*, p. 61.

21) *Ibid.*, p. 61.

下でカビに覆われていた。皆、地中深く、頭をアフリカに向けて埋葬された。飛び立てるように²²⁾。

墓が存在する場合

シモーヌは『時が経つのも忘れて』において、アンドレによる『最後の義人』執筆に関して記している。

彼は言葉によって、煙でできた巨大な墓の上に白い石を置いた²³⁾。

彼はエクリチュールによって、永遠に消え去った世界のための墓を建てることができると考えていた²⁴⁾。

アンドレのこうした意図は、『最後の義人』冒頭で題辞として引用されるM.ジャズトラン「葬儀」の一節からも伝わってくる。

いかに私は 死を悼むことができよう
 いかに私は 葬儀に参列できよう
 ひと掴みの灰となり
 天と地の間をさまよう あなたのために
 M.ジャズトラン「葬儀²⁵⁾」

アンドレが、ユダヤ人でも黒人奴隷でも、非業の死の末に埋葬されなかった人々に心を寄せ、その無念を汲み、小説に注ぎ込んでいたならば、彼の作品は死者たちの墓の代替物ということになる。ところが彼は、墓を建てる試みとしてのエクリチュールにひたすら前向きに、直線的に取り組むのではなく、文章を書いては捨て去っていた。シモーヌは次のように証言する。

[...] 毎日、彼は細かくて優雅な文字で山ほどの紙に書き込んでいた。それから皺くちゃにして、ごみ箱に捨てていた。それを詰め込んだプラスチックの袋で車のトランクをいっぱいにすると、私が不在の間に村のごみ処理場に運び込んでいた²⁶⁾。

この身振りは、ユダヤ人大虐殺の生き残りとして死者の記憶と向き合うことがいかに困難であるかを伝えている。彼にとって、墓の代替物であるテキストの生成に取り組めばそれで済む、という単純な話でもないようである。また、書いては捨てるというアンドレの営みは、彼の小説における墓のあり方とも響き合っている。確かに彼の小説は、死後に墓を持つことさえ

22) *Ibid.*, p. 123.

23) Simone Schwarz-Bart et Yann Plougastel, *op. cit.*, p. 22.

24) *Ibid.*, p. 47.

25) André Schwarz-Bart, *Le Dernier des Justes*, *op. cit.*, p. 7.

26) Simone Schwarz-Bart et Yann Plougastel, *op. cit.*, p. 186.

許されなかった人々に焦点を当てているが、実際のところ小説中に墓はまったく存在しないのではなく、問題を孕んだ形で存在している。

『最後の義人』の第2章「ゼミョツク」では、1917年のロシア革命に続く時代に、ポーランドの架空の小村ゼミョツクで発生した、コサック兵たちによるユダヤ人虐殺が描かれる。主人公エルニの父ベニヤミン・レヴィの青年時代の出来事である。このボグロムによってベニヤミンの3人の弟が殺されると、彼は墓穴を掘って弟たちを埋葬する²⁷⁾。母ユディトはその墳墓から離れられないほど悲しみに暮れるが、やがて一家はドイツに移り住み、その後、迫害を逃れてフランスへの移住を余儀なくされるため、ゼミョツクの墓に参ることはできない。

そして、カリブ海連作の第1作『青バナナ添え豚肉の料理』には、墓が奇妙な形で登場する。この小説の主人公はソリチュードの曾孫マリオットである。1902年に発生したマルティニックのプレ山噴火によりサン・ピエールの町が壊滅し、家族を失った彼女は、破滅的な彷徨に身を委ねることとなった。南米やアフリカへの滞在を経て、パリに辿り着き、1950年代には老人施設で孤独に暮らしている。マリオットは噴火で命を落とした母オータンシアの記憶を呼び起こそうとするが、執拗に現れるのは祖母ルイズの姿と言葉である。ソリチュードの娘であるルイズは、1848年の奴隷制廃止前後の時代を生き抜いた末、大往生を遂げた。今や老境にあるマリオットの脳裏を掠めるのは、マルティニックで、亡くなったばかりの祖母ルイズの墓に唾を吐いた、子ども時代の記憶である。

いったいなぜ、私の記憶に忍び足の少女が浮かんでくるのか？ 黒に青を重ねたような色調の夜だけれど、両眼を松明のように輝かせて、土、ドライフラワー、貝殻でできた墳墓の間を抜けて、新しい墓に唾を吐きかけようとしている。この少女の姿は、なぜ私自身なのだろう²⁸⁾？

マリオットはかつて、祖母の墓に唾を吐きかけて出自や祖先を否定したが²⁹⁾、いまやその記憶も遠のき、虚実が定かではない。一方、母オータンシアの墓はマリオットの心にだけ存在していて、それは母の面影を飲み込んでしまう。

でも私が呼びかけるほどに、母さんはますます土に沈んで、1902年5月8日に彼女が自分のために、私の心に掘った奇妙な墓穴に入り込んでしまう。あの日、火山の溶岩が波となって押し寄せ、彼女の小さな世界を覆い、この世に生きた証すべてを溶かしてしまった³⁰⁾……。

カリブ海連作において若いマリオットから家族と故郷を奪うプレ山噴火は、『最後の義人』のアウシュヴィッツに対応しており、マリオットの心に宿る墓が愛する母の記憶をうずめてしまうという状況は、作者自身の心境を映し出すと考えられる。このようにシュヴァルツ=バルトの小説世界では、墓が存在する場合でも、死者の記憶に寄り添うことを促すのではなく、不

27) André Schwarz-Bart, *Le Dernier des Justes*, op. cit., p. 91.

28) Simone et André Schwarz-Bart, *Un plat de port aux bananes vertes* [1967], Seuil, « Points », pp. 149-150.

29) ガブリエル・サイドはこの状況について、「マリオットは祖母の墓に唾を吐いた後、自分の出自を自身の奥深くにしまい込んだ」と述べる。Gabriel Saïd, « Simone et André Schwarz-Bart, *L'Ancêtre en Solitude* : un héritage à deux voix », *Diacritik*, 13 juin 2016. 2021年4月4日に参照した (<https://diacritik.com/2016/06/13/simone-et-andre-schwarz-bart-lancetre-en-solitude-un-heritage-a-deux-voix/>).

30) *Ibid.*, p. 96.

安定で問題を孕んだものとなっている。

結びにかえて

ソリチュードをめぐる史実は断片的に伝わるのみであったが、アンドレがそれを発展させて1972年に小説『混血女性ソリチュード』を出版すると、カリブ海地域の人々から糾弾された。白人は黒人の物語を適切に語ることはできないという、「正統性の裁判」が引き起こされたのだ³¹⁾。その後も彼は書き続けたが、カリブ海連作の続きを出版することはなく、2006年に他界した³²⁾。

しかし現在のグアドループでは、この島のシンボリック的存在を歴史の闇から救い出したアンドレの功績が認められている。1999年にソリチュード像が建立された以外にも、複数の通りに彼女の名が与えられた。ツアーガイドの説明やインターネット上では、小説『混血女性ソリチュード』において提示される場所と時間が紹介されている³³⁾。



パリ17区のソリチュード公園



ソリチュード公園の一角にある
ドリス・サン＝アルシデ作「鉄鎖」(2009年)

そしてパリにも2020年に「ソリチュード公園」が作られ、この街で初の黒人女性の像として、2022年5月にソリチュード像が建立された。

アンドレ・シュヴァルツ＝バルトは墓の代替物としての文学作品を残しただけでなく、墓のない死者のためのモニュメント建造に実質的な貢献を果たした³⁴⁾。

31) Simone Schwarz-Bart et Yann Plougastel, *op. cit.*, p. 159.

32) 2010年、残りの原稿はアンドレによって処分されたと考えていたシモーヌに対し、フランシヌ・コフマンは、生前のアンドレとの会話に基づき、カリブ海連作の原稿は存在するはずだと伝えた。コフマンはグアドループのシュヴァルツ＝バルト宅に滞在し、アンドレの遺稿を検討した結果、少なくとも小説2作分に相当する草稿を見出すことができた。シモーヌがそれに手を入れて出版したのが『孤独の祖先』(*L'Ancêtre en Solitude*, Seuil, 2015)と『さらばボゴタ』(*Adieu Bogota*, Seuil, 2017)である。Natalie Levisalles, « Quarante ans de "Solitude" », *Libération*, 28 mai 2015, p. 29.

33) Simone Schwarz-Bart et Yann Plougastel, *op. cit.*, p. 162.

34) 本稿は、日本学術振興会・2021年度科学研究費助成事業(基盤研究C)「ロラン夫人の記憶の継承に関する研究」(課題番号20K00488 研究代表者・中里まき子)の研究成果の一部である。